

ミミズの力は、すごいでえ！！

豊能町立吉川保育所（大阪府豊能郡）

[5 歳児]

【 5 歳児の様子 】

3歳児クラスの際に『ミミズ』との出会いをした子どもたち。くま組（5歳児）に進級した際には、手に持って『ミミズ』を扱う様子も手馴れたものであった。まず『コンポスト』の当番ではミミズの居る場所もよく分かっていて、そ〜っと新聞紙をめくりキャベツやニンジンなどをどけて見つけていた。「ほら、かわいいやろ！」と嬉しそうに手のひらに乗せたミミズを見せる。誰一人嫌がったり気持ち悪がって触れない子がいなかったのにも驚いた。当番の仕方も自分たちで進めていくくらい定着していた。何でちぎった新聞紙を霧吹きで湿らせるのか？ということも「シュッシュ(霧吹き)したらくさいねん」とよく分かっている。

【夏の当番では】

おやつに出る子どもたちも大好きなメロン。その皮をあげた時、一週間もたたない間に網状になったのを見て「ぼくらとおんなじもん、すきなやなあ」と観察して小さなミミズの大きな力を知った。野菜は腐ってからしか食べないのでなかなか減り具合が見えてこないが、甘くて美味しいものはすぐに食べてしまうことを実感した。

コンポストはミミズたちにとっても快適で、年中卵を産んでいた。その卵から赤ちゃんが生まれ、新聞紙の間に潜り込んでいる透き通った短い糸のような赤ちゃんミミズをつぶさずつまんでそ〜っと手のひらに乗せて、就学前の委員会で参観に来られた先生方に見せていた子どもたち。その様子を見た中学校の先生が、「今の中学生でも幼児期にこのような土をいじる経験をしてきた者は少ない」「体験をせずに学習だけで得る知識は、比較にならないくらい乏しい」と、感想を述べられていた。当番の仕事内容を尋ねられて語る子どもたちは、まるでどの子も『ミミズ博士』のようであった。

夏野菜の栽培では、『ミミズのいた土』と『肥料を入れない土』を使ってキュウリを育てた。『ミミズの土のキュウリ』には、時々『ミミズのおしっこ』もやっていた。育ち方の違いは歴然、『肥料を入らなかった土のキュウリ』は20cmほど伸びたきり育たず、小さな小さなキュウリをたった一個実らせただけだった。

【秋のある日】

「これ(ニンジンの間引き菜)、ウサギにあげたって！」と声をかけてくれる保育所の前の道路をはさんだ畑で野菜を作っているおじさんがいる。動物当番の時「先生、うさこの野菜くれるおちゃんにも『ミミズのおしっこ』あげようや！」と『ミミズのおしっこ』の栄養をよくわかっている。

「おちゃん、これ『ミミズのおしっこ』やねん。これ、かけたら美味しい野菜になるで。ほんまやねん」「10倍に薄めて使ってや！このままかけたらきついで。」「おっ！うれしいなあ。じゃ使わせてもらおうわ。また美味しい菜っ葉できたらあげような」と地域の人にもしっかりと『ミミズのおしっこ』のアピールをしていた。ペットボトルに入れた『ミミズのおしっこ』のラベルは、全てくま組の子どもたちが描いて、自分たちで貼った。

【終わりに】

ゴミ当番の活動でもゴミの分別は行なっているが、ミミズが分解して土に返すことのできるゴミはゴミではなく、分解して自然界に返すことの出来ないものこそ本当のゴミだということを、観察用『ミミズコンポスト』を通して理解しつつある子どもたちである。幼児期からゴミに関心をもたせることで、ゴミの減量に工夫を凝らすことのできる人になってくれることを願う。

また、『ミミズコンポスト活動』を通して自分たちよりもはるかに小さい生き物が、自分たちがゴミだと思っていたものを分解し、肥料にしていく行程を観察したり、力の加減をしないとつぶれてしまうミミズの卵や赤ちゃんミミズをそ〜っとつまむ経験をしたり、重さを感じたり、ミミズを通していろいろな生活力(学力)をつけていって欲しいと願いながら、子どもたちの活動を見守っている。

< ミミズコンポスト >



①メロンの皮を入れる



②ちぎった新聞紙を入れる



③新聞紙をしめらす



コンポストの土を畑の土に混ぜる



ミミズの土とおしっこが肥料となり、どの野菜も大収穫

みどころ

ミミズの力や魅力を知った子どもたちにとって、「ミミズコンポスト」がしっかりと生活に密着した環境になっていて、自然環境に対する意識の高まりが見られます。また、「自分たちと同じように甘くて美味しいものが好き」という幼児らしい発見など、ミミズの世話やかかわりを通じて小さな生き物へ愛着が感じられます。このような確かな経験の積み重ねが「科学する心」の育ちに結びつき、自然とのかかわり方や自ら生活を創り出していく力となっていくことが期待できます。